

校歌制定時の秘話②【創立 70 周年記念誌 盲教育追想より】

## 懐 起 断 草

井上 卓美

春花秋月、星霜ここに七十年、何たる慶祝。小生在任当時五十周年の祝典を挙げたのはつい此の間のような気がするのに、もう二十年という歳月が流れ去った。懷えば、盲天外翁の盲聾者に対する抑えきれぬ愛心から決然起っての盲啞学校創設、爾来今日のすばらしい施設経営を見るに到る迄の曲折轉變の校史は、校運の発展隆昌に如何なる事態が惹起しよう、永遠に輝くのである。

私が本校に就任したのは昭和二十五年の四月、戦後の疲弊未だどん底にあえげる時であった。しかもこの教育については其の知識はおろか経験皆無の素人、にもかかわらず、前任二神常一校長は何の故にや身に余る懇切な懇懇と、一方県当局への並々ならぬ推挽を賜り、二十四年九月の就任を強要されたのであったが、学年途中の異動の不可を理由に好意には感謝しつつも辞退したのであった。そこで県当局は二神先生に年度末迄在任の諒解を遂げられ、また校長舎宅も構えてやるからと有無を言わせぬ下命となった。思えば何らの自信も抱負もあり得ぬ者が丸の裸でまな板に乗ったわけである。時は陽春というのに肌寒を覚え心おののきながら着任した次第であるが、流石特殊教育に提身の先生方、熱い愛心を以て迎え且つ支えいただき、着任後の日々は寧ろ楽しさをさえ覚えたものである。

さて、着任直後に感受したことは、第一に盲生諸君の学習負担の如何に過大であるかということ、即ち知識取得の八割を占めるといわれる視力を欠落し、聴触覚による学習の不便さとその限界性、更には普通教科と職業教科の両科必修という、普通の学校の二倍三倍の負担であること。第二には盲人として生き行くための必然的要求から、職業学科優先・普通学科軽視となり、文化的教養のレベル低下を余儀なくされるという悲しい現実である。そして第三には此の不可避なる運命を負える学習の現場に如何に取り組むべきかということであった。普通校から転勤してきた者の目にうつる当時の実態は、明らかに職業学科優先であった。それは将来国家試験に合格し資格を取って、一般社会に伍して生計を立てねばならぬところからのやむなき結果であったものと思う。

併しながら人間として生をうけたからには、人間として完成することが第一義 — 理想である以上、これをめざす文化的教養の強化即ち普通教科の学習が片手落ちになることは許されない。此の点からいえばむしろ普通教科が優先されるべき理路がある。盲人と雖も高い文化人として人生の意義を全うし、其の満足と愉悦感に真の生きがいを得ねばならない。

盲人だからとて此の点に於て劣等感を持たせる結果をきたすような教育に墮とすことがあつては相成らないのである。ありがたいことに職業学科担当の先生方も此の考え方 ― 方針に理解と賛同を示され、その協力と普通教科担任の先生方の努力によって、短期間に存外の成果を挙げることができ、今でもその時の感激は歴々として新鮮である。

更に、その豊かな文化的人間形成に於て主導をなすものは情操であるが、情操の開発陶冶の主軸はいうまでもなく芸術教科、特に音楽教育の作用するところが大である。しかも盲教育に於ては格段にその比重が大であることも説を要しない。そこで問題は適任者の獲得であるが、之が容易でない……来てくれないのである。ここに及んで、仮初にも適任とはいえないばかりでなく、親子同勤のまずいことは分かり切ったことなのだが、この場合致し方なく、後任者が得られる迄ということで、好まぬ息子を説得し高校就職を断念させ、目をつむって発令手続きを執つたのであつた。そして校歌を制定したり寮歌や応援歌をこしらえたり、バンドを編成したりして学習に興味をもたせ、私の郷里大洲喜多方面に実習を兼ね演奏旅行を試みたりしたことなど忘れがたい思い出の一コマである。

その他盲学校に於ては掲示板よりも校内放送設置の方がより有効適切である故必設すべきだ、資材さえ整えたら取り付けは自分らでやる故是非とも……、息子の強い要請に私も納得いく筋もあり、資材だけならと予算を立て、二十六年二月、当時盲学校としては全国的にも稀な校内放送施設を整備したのであつた。先生も生徒も初めて経験する珍しい仕掛けで、しかも面白く楽しいものだし活用の道も多いので、生徒らはもとより先生方も喜んで大いに活用したことであつた。生徒達は自分らで放送委員会を作って放送内容や技術を研究し、その取扱いにも次第に習熟して行き、予想以上の教育効果をもたらし、又学校運営の面にも利便する所が多大であつた。

その外五十周年の祝賀式典や色々な特別行事の忘れ得ぬ思い出は限りないが紙面に限りがあるので、最後に校運の益々隆昌を祈りつつ擱筆する。

(昭二五. 四～三四. 八在職、第四代校長)